

● 高澤良一 第四句集 ぱらりとせ

● 春

旧正のはつかに拳がる沖つ波
とんど火の先づは松葉を炙る音
とんど火の爆ぜて肉声聴くごとし
子ねの年の郡上の井水小走りに
宝刀の切字を頼む歳旦吟
ピスタチ才殻割る音に年立てり
恐竜的存在として賀詞述ぶる
やっかいな正月の富士詠み初めに
ほうこんな本が出たかとメモ始め
好調と云はるる年でありたかり
奥六日祭の間に花奪はい祭の花造り
屠蘇の酔ひ「吉原雀」聞きながら
惟然も亦七種摘みけむ七器山しちき
膝に来る日差しに年酒出来上がり
乗初のディーゼル音に熟睡せり
乗初の車中キャラメルかほるなり
さきざきに富士を眩しむ旅始め
浅間せんげんさん詣で破魔矢を高かかけ
ひととほり読み通さねば松の内
川床の藻のたゆたひも三日経て
十姉妹の籠を日向に三日かな
洗ひ場に水走り込む三日かな
青麦の放てる夜気と覚えけり
日曜日大魚籠のごと朝寝せり
浜に出てほんわかあったかさうな雲
人参の葉っぱのやうなやつはアネモネ
伊予柑の皮の脂をとばしけり

うぐひすの笛方雀の囃子方
鶯餅つまむに作法あるごとし
好意ありがたく綻ぶ梅のなか
曇日の目許ぼんやり梅咲けり
紅梅の雪洞咲きに遍き日
巨福建長寺山梅は五百木いおに先立ちて
紅梅の一二輪ほど好意に似て
老紅梅能う限りの花付けて
紅梅に寄りくるひとりふたりかな
白梅の日向を開き呉れるごとし
夕おぼろ入湯十訓声にして
三亀松のようはあようの朧にて
出開帳善光寺力む仁王の脇抜けて
香煙を掬ふ手ぬつと御開帳
人混みよりわが身抜き取る出開帳
開帳寺門前臨時郵便局
出開帳頭つむりの間のご本尊
海棠の蒼解く風方丈へ
下駄鳴らすごとし古刹の山蛙
口語で鳴く蛙文語で鳴く蛙
睨め廻す河鍋曉齋筆「風流蛙合戦圖」
団子虫団子いびつに陽炎へり
石と玉取り違へては亀の鳴く
俳諧の腕力振るへ其角の忌
未完なる塔にしぶけり櫓の芽
見習ひのガイド訥々木の芽どき
篠困ひして金盞花まだ葉がち
陰る日に臆病咲きのクロッカス
廃れたり桑と甲源一刀流

靄といふおほやうなもの桑巻けり
恋猫の往き来にそぞろ心かな
恋猫の老嬢坐り直しけり
恋猫の香油のやうなこゑを曳き
須らく恋する顔の猫であり
恋猫は日に膨らめる瞑想家
看護婦の一語納得サイネリア
曙のさくら一鳥抱へをり
幹に花咲かせてさくらはちきれさう
いつときは光帯びけり山桜
ほころぶと告ぐる言葉の花より浮く
揺れ出して息呑むほどの山ざくら
本来の彩は斯くなる山ざくら
人の出も日増しにソメイヨシノかな
日本語乱れ初めても山櫻
花の風鯉の背鰭を吹きにけり
鉛筆を走らす花鳥諷詠漢
かわず掛け河津が郷のさくら見に
ここ河津緋寒桜の田舎咲き
海渡りさくら咲かせに一暖雨
ひよひよと大島桜吹かれをり
鳥らいそいそ河津桜の原木へ
言語野に射して言の葉花明り
幹ずんと押し出しのよき里桜
当たりゐし山の日を花逸したり
雨ありし上野の山の花の首尾
鳥ごゑに奥行き深き花の山
花揺るゝは船酔に似て昼日中
桜薬ばかりの赭き木となれり

半島の出鼻さざゑの水覗突漁みずきりよう
ふなばたに鬼殻さざゑ揚げられし
近海もの今は不鯛ぶでえとさざゑが匂
山茱萸の向ふ側より差し込む旭
幹照らす春月チャンチンモドキの木
春潮にをりをり差せる風の翳
一睡のゆめに磯長しながの春かもめ
春泥をぶつぶつ云ひつ脱しけり
春眠暁を覚えずまでゆかず
夕野火のうさぎの耳のやうな炎よ
末黒野ゆく雲のすこぶる女性的
末黒野の芒夜盗のごとくなり
ストツクの嗚呼このかをりこのかをり
ストツクの蒼ほのぼの眠くなる
ストツクを剪るやほろほろ虫発たせ
巢箱懸け穂高赤松天然林
浅春のカクテル光線エノケンに
梢見てあゆむ乃木坂春浅し
竹秋の物心より直心
泡吐いて能事終れり大田螺
ボヘミアン田螺の唄が聞こえ来ぬ
種蒔きに出て退屈の虫退治
厳しく鹿爪らしくたらんぼの芽
七抱大楠*河津七抱七楠の唯一の現存木たつぷり暖雨吸ふ
囀れり横網格の大楠も
恰幅よき蘇鉄に朝の一暖雨
チューリップ奉書めく葉を先づ立てぬ
上等な蜂蜜いろの蝶とべり
日中ゆく蝶のうねりを湧水も

知恵の輪の外るごとく蝶別れ
初蝶をエイゼンシュタイン流に撮れ
茅花咲き自由乗降区間なり
常節を突き磯風のやうな息
鳥雲にインターネット日和かな
接骨木のおおどじ踏んで咲きにけり
宇和島のネーブルほとばしりにけり
二股伊東若冲 野菜涅槃図のすずしろ涅槃し給へる
野遊びにクロワツサンのやうな雲
野遊びの服を叩いて起ち上がり
瞬きてあけびの雄花雌花かな
花あけび雨うすずみに降るばかり
国栖人に腹赤魚はらかのうおの瀬をのぼる
当り来た来た来たさくら鮎ならむ
唐破風をつゝと花屑奔りけり
花こぶし花混み合ふてうるさかり
花辛夷はたきづかれし思ひかな
花こぶし少し荒んで吹かれをり
辛夷散りひつちらかつてをりにけり
辛夷より翔ち損ねしや残り花
色合ひのおとなし過ぎる花大根
箱蒔きの花種うんともすんともや
種袋振り回しつゝ喋々と
へんにたかく咲いて月夜の花菜かな
いちめんの花菜みつばち見えてくる
菜の花に虻は呪文を唱えけり
花冷えの青天井に及びをり
緋桃の緋畑の空にぶちまけて
桃の花想ひ凝らさばボツティチェリ

花桃のやいのやいのと日表に
からからに乾く畑土桃の花
阿呆陀羅經極意は桃の花に聞け
二三日降ればその内桃咲いて
桃の咲くぽかぽか陽気ここ両日
山麓に日色を湧かせ花りんご
同齡のりんご若木の花連ね
原木のあかとき色の花りんご
盛り売りの蛤ちゆうちゆうたこかいな
えいほうと松も春めく東海道
半島のももいろがかる春雑木
すっかり春我等がビルも霞に入る
春を感じ来してふ朝の顔に遇ふ
醜男ぶのぶぶの面持ちの春不鯛ぶだい
心臟吾が病ひは僧帽弁閉鎖不全なればの戸口の直し春にせむ
日まみれの梢立春過ぎてゐし
立春のいつか過ぎをる机かな
春近む音の一つにしづり雪
内海へ春は潮目もくきやかに
春暁の川波びよんとびよんと立つ
春子盗る猿は「さうさな十五頭」
春雨のほろつと零るゝところをみる
測温測圧カテーテル検査にて入院検尿採血春隣
看護婦の大き叱声春隣
大部屋に一つ空き出来春隣
ビスケット色の三つ四つ春の雲
良性の雲のはらわた春の月
根詰めて汀を打てる春の濤
すぐ思いあたる仕種を春の蠅

半島の椎楠打ちて春の雹
枝々にうるみ初めたる春の星
草の中鳴りをひそめて春の水
鳴る處見つけて春の水鳴れり
ちよろちよるとちよろつと春の水ながる
さきざきに鳴りてことごと春の水
きつぱりと春雪あがる挿木畑
駆け廻り蟹は干潟のプロデューサー
鹿尾菜生ふ礁ラッコの背のやうに
男っ氣世帯大内雛飾る
雛調度牛車ぎしやより誰が降りにけむ
黄は黄でも日向水木の薄黄好き
古草の上を鳥の頭行き来せり
古草となりし賑はひ天下あまがした
半島のかかと辺りの防風摘む
頬白のディスクジョッキー生まれり
格天井牡丹圖牡丹の頃に来て
甘茶仏乾き易きを淋しめり
花御堂新たななる風呼びにけり
起請文生島足島神社累々芽吹く杜にて
色合ひも野暮な櫟の芽吹きかな
付け足しにそこらの小木も芽吹山
芽吹かんと樹皮を寄る辺の洞櫟うろ
家々の立つる物音ものの芽に
やどかりの新しがりや宿替へて
ご門前朝の山吹なまなまと
たっぷりと日を浴み山焼き前の萱
山焼きの付け火ちよんちよん小走りに
山を焼く煙くすりと上りけり

手をゆるくつなぎのぼれり山焼く火
気紛れな山火すすつと山の肩
溶岩原に向かふ山火の急先鋒
焰ほむ焰ほむを呑んで大きく山焼く火
山火爆ぜ爆ぜては山を呑む勢ひ
山を焼く音の漣火の漣
山焼きの灰のわらわら頬を打つ
太陽の坩堝真上に山を焼く
山焼に煤すすけごころを払ひけり
なまくらの山火道端焦がしをり
焼山の段だら縞に日の新た
通り魔に遇ひし面持ち焼山は
焼山の焦げ目曼陀羅日表に
燃えさしに山火の火力そこそこや
焼山は心腹の友さながらに
焼山の灰のほろりと道よぎる
山火果つ白きは蓬の灰ならむ
雪解山降り注ぐ日は天蚕糸
呼子鳥専心花鳥諷詠経
蓬萌え太鼓の胴のやうな道